

ウィリアム・Z・フォスター

『アメリカ諸國政治史概説』

Foster, William Z.: Outline Political History of the Americas. N. Y., International Publishers, 1951. 668 p.

本書の表題をひとめみて、ただちに、いわゆる教科書ふうの概説書の類をおもいうかべる人があったら、それこそ大きな失望を感じるにちがいない。そのような人は、ともすれば、たとえ政治史的な側面からであるにもせよ、あらゆる歴史事実を網羅的に（したがってじつは、そこに内在する本質的な相互連関性などにはおかまいもなく）もりこんだあたかも見事に調理され配膳された料理のようなできばえを、本書に、期待するでもあろう。けれども、そのような期待に、この本は、いっさい應じてくれない。

とはいえ本書が、北アメリカ・中央アメリカ・南アメリカにまたがるあの廣大な西半球 Western Hemisphere の諸國の、總括的な政治史であることにはかわりない。表題にみられる Americas とは、これら西半球のアメリカ諸國のことである。ここで總括的=general の語は、統一的=unified の語でおきかえたほうが、著者じしんの眞意をよりよく伝えることができるようにおもわれる。

アメリカ諸國を、ただ単にそれを構成しているそれぞれの國の歴史としてでなく、全體として——互いに作用し反作用しながら發展してきたひとつの全一的な過程として——その内的關連において統一的に把握することの必要は、それらの諸國の地理的・經濟的・政治的・文化的なもろもろの絆が、過去4世紀餘にわたって、きわめて緊密に織りなされてきたという一般的な事情からも、充分に理由がある。Robert Mackenzie, *America, A History* (1894) や H. E. Bolton, *History of the Americas* (1935) などの書物はこの要請に應じたかにみえた。けれども、これらの書物は、なにぶんにも本書の著者フォスターが意圖したところとは、多くの點でかなりの距りがあった。著者が現在おかれている政治上の立場、それとはきってもきれない關係にある彼の思想的な立場を考えれば、これは容易にうなづくことができる。第二次世界大戦を経た今日、著者が何故に敢て本書を世に問うに至ったかについては、さらにまた別の理由があるはずである。

すなわち著者みずから言うところを要約すれば、第1に、ウォール街を先頭とするアメリカ合衆國の全一的な帝國主義支配が今や全西半球諸國をもそのヒンターラン

ドの地位におとしめようとしていること、第2に、さらに重要なことは、そのような隷屬化に對する廣汎な組織的反抗が合衆國を含む非常に多くのアメリカ諸國民によってくりひろげられていること、これである。アメリカ合衆國の帝國主義の本質からでてきた基本的にはこのような2つの現實が、著者に本書を書かせた直接の理由である。したがって本書が、20以上にもものぼるアメリカ諸國のあれこれの歴史上のディテールやそのあらゆるアスペクトを書きしるすことを、はじめから企圖していなかったことはいうまでもない。ここで一貫してとられた立場は、アメリカ諸國を西半球という場でつねにひとつの統一體として把握しながら、その經濟的・政治的・文化的な發展ないし衰退の過程を分析するとともに、階級闘争の一般的な發展をそれぞれの國に即してあとずけることによって、ひとりアメリカ諸國民のみならず、全世界の國民の、現在ならびに將來への道を指し示すことである。著者のいう政治史とは基本的にこのような性格をもつものであって、決してあれこれの政治や政治家の歴史ではない。同時に概説というも、このような觀點から一筋の線を貫くの意味を含んでいる。

通史として決して尨大とはいえない本書は、それでも参考文献 (Reference Notes) や用語解説 (Glossary)、それに數枚の地圖や索引をいれると 668 頁に及ぶ。全體が3部にわかれており、第1部 The Colonial Period, 第2部 From Wars of Independence to World War I, 第3部 From Capitalism to Socialism となっている。各部に割當てられた頁數は第1部、第2部がほとんど大差なく 170 頁を前後し、第3部が 250 頁を越えている。しかもこの第3部のうち3分の2以上 (約 180 頁) が第二次世界大戦から朝鮮内亂の勃發前後までである。かたちのうえでのこのような構成が、そのまま本書の本質に直接に關係している。そこに、人は、さきにみた著者の意圖をはっきりとうかがうことができるであろう。

發見の必然性ならびにその後の組織的な探索や發展という點で、嚴密には 1492 年のコロンブスの偉業に始る新世界の歴史は、1776 年 (イギリス植民地 13 州の獨立宣言) —— 1837 年 (カナダの動亂) のいわゆる The American Hemispheric Revolution の時代で、いちおうその幕を閉じる。第1部はこの期間をとり扱っており、そこでは、スペイン、ポルトガル、オランダ、フランス、イギリスなどの、理論的にはマーカントィリズムで武装された舊世界の先進諸列強の支配階級が、自己の植民地を獲得するために、互いに血で血を洗う激烈な相奪戦をくりひろげながら、現實には武器と教會の力により、どのようにして新大陸を征服していったか、またこのよう

な隷屬化に對して未開發地域の土着インディアン、さらに黒人奴隸を含むいっさいの植民地の民衆がどのようにして反抗しつづけたか、そして革命期を通じてそのような情勢がどのように變化し發展して、アメリカ合衆國を先頭とする西半球諸國の National Liberation が、どのようなかたちで、どの程度まで、なしとげられたかということ、歴史の事實に照して具體的に展開している。

革命は、たしかに、西半球諸國の從來の諸關係を一新した。そればかりではなく、それがその後の世界史の動きに直接にまた間接に與えた影響は高く評價されねばならぬ。それにもかかわらず、1803年のハイチの奴隸革命を例外として、革命の指導權が概して大プランター=地主と大商人=商業資本家の双手に握られたという一般的な事情は、そのじっさいの原動力をなした植民地の民衆のいくたの尊い犠牲にもかかわらず、これらの革命をかなり不徹底な結果にみちびいた。わけても、奴隸制度を解決しえなかったことは、致命的な缺陷をさらけ出した。このことは、基本的には革命の一大メルクマールともいべき土地問題を解決しえなかったことを意味している。同時に、それは、National Liberation の不完全さ、民主主義の不完全さを意味する。爾餘の西半球諸國に比して、比較的徹底した革命をなしとげることができたアメリカ合衆國においてさえ、その解決はおよそ1世紀後の南北戦争 The Civil War 1861—65 をまたねばならなかったのである。南北戦争が獨立戦争よりも徹底したブルジョワ民主主義革命であるといわれるのはそのためである。

けれども、革命期を通じて、舊世界の先進諸列強の直接的收奪の壓迫から解放された西半球諸國に、資本主義は急速に成長しはじめた。ことにアメリカ合衆國において著しかった。第2部ではこれらの地域における資本主義のそれぞれの發展をあとづけることによって、レニンの資本主義の不均等な發展の具體例を示している。そこに早くも著者は資本主義の内在的諸矛盾と、ことにその後進地域への侵略性を強調しながら、やがて資本主義最高の段階としての帝國主義への移行の契機をみいだそうとする。しかしそれらはあくまで楯の一面であって、著者の關心はより多くこの發展のなかに生れ、これとともに独自の意識をもって育ってきた労働者階級の、絶えざる闘争に注がれる。だが、この時期における西半球諸國の労働者階級一般の意識は、まだ資本主義の枠内にとどまった。「かれらは、封建的=資本制社會の枠内で、その生活條件を改善するため闘った。かれらは、資本主義

そのものを打倒して、社會主義をうちたてようとはしなかった。」(p. 352)

労働者階級が眞に自己の解放の道を知り、そのために邁進するようになるまでに、さらに歴史はいくたの貴重な經驗を——かつて歴史にみられなかったほどの大規模な殺戮と困窮の犠牲さえ——經なければならなかった。第3部がこの過程をとりあげる。

それじたいが資本主義に内在する諸矛盾のあらわれである第一次世界大戦から、第二次世界大戦を経て今日に至る約半世紀の時期は、著者によって、資本主義の一般的危機——戦争と革命が世界的規模で危機そのものからみあっている——の深化の過程として描かれている。第一次世界大戦、ロシア革命、1929—33年の大恐慌、ファシズムの擡頭、第二次世界大戦、東歐その他における人民民主主義諸國の成立、中華人民共和國の誕生、さらに東南アジアや朝鮮などの民族解放闘争から新しいファシズム、戦争の危機へ——。これら一連のできごとは、この危機の深化の過程の集中的なあらわれであって、なによりもまず資本主義の衰退として、同時に社會主義の發展として把えられている。このような世界的規模のなかで、ひとりアメリカ合衆國の資本主義だけがその例外ではありえない。「寄生的、食人種的になった¹⁾」この國の資本主義は、やがては他の資本主義と同様に必ず社會主義によってとって代られるであろうし、またとって代えなければならない。そして、「これこそが一般に世界の趨勢であり、同時に西半球諸國民の道である」(p. 611)と著者は最後の言葉を結んでいる。

すでにみた著者の立場と本書の内容から、この本が、いわゆる歴史の専門家だけを對象としていないことは、いうまでもない。さらにそれらの専門家の立場からは、本書に、きわめて多くの注文や反駁がなされるであろう。けれども、それ故にこそかえって、わたくしには、本書が、日本の歴史家にとっても、その立場の如何を問わず、大きな問題を、ことにその方法論において提起しているようにおもわれる。日本の歴史家にとって、目下の研究の最大關心のひとつが、例えば歴史學研究會の全國大會などにもみられるように、平和と民族獨立の問題だからである。

(本田創造)

1) William Z. Foster, The Twilight of World Capitalism, 1949, Chap. III. *American Capitalism Grows Canibalistic*